

Title: 「明日は明日の風が吹く」



志村 賢一  
1987年生まれです。  
いつも失敗ばかりし  
ている私ですが、海  
外でもたくさん失敗  
して行きたいと思  
います。

## ● 最近のエントリー

- ☑ ゴム園  
(2009.05.08)
- ☑ 写真展  
(2009.05.03)

## ● アーカイブ

- ☑ 2010年03月
- ☑ 2010年02月
- ☑ 2009年09月
- ☑ 2009年08月
- ☑ 2009年07月
- ☑ 2009年06月
- ☑ 2009年05月
- ☑ 2009年04月
- ☑ 2009年03月

## ● 投稿カレンダー

## ● カテゴリー一覧

## ● ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校  
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE



RSS 2.0

明日は明日の風が吹く &gt; 2009年05月 アーカイブ

09.05.08

## ■ ゴム園

[Tweet](#)[Check](#)

今、バンコクから南東に300キロほど離れたところにある、天然ゴムプランテーションで取材をしています。



僕が通っているプランテーションは4人家族で運営しているところで、彼らは全く英語が通じません。多分おばさんはタイ語の読み書きも出来ないと思います。

彼らと僕のコミュニケーションはどのようにしているかというと、事前に用意しておいた指差し会話帳とジェスチャーのみでコミュニケーションをとっています。

今のところなんとか、コミュニケーションはとれています。

そんな中、タイ語が全く聞き取れない僕でも、一つだけ、聞き取れた言葉があります。

『マラリア』です。

おばさんが体のあちこちを自分の手で、バシバシたたきながら、『マラリア』、『マラリア』と叫び続けています。

『マラリアはここでもあるのか?』と大声の日本語で聞くと、『ウン、ウン』と首を大きく縦に振ります。

このプランテーションはとんでもない数の蟻と蚊が存在していて、写真を撮るために30秒ほど停止すると、もう蚊に3カ所ぐらいはさわれます。

体の動きを止めたら、蚊らの思うつぼ。

常に体を動かしていないとだめです。

これは対策を考えないと、撮影どころではない。

しかし、よく観察してみると、タイ人はあまり蚊にさされていない。

たとえ蚊が皮膚の上に止まったとしてもすぐに叩き殺す。

僕が観察の上、出した結論は、彼らと僕では育った環境が違いすぎる。

だって蚊に対する反応スピードが違いすぎます。絶対にまねできません。

そんな彼らでも、一応、蚊対策をしています。



こんな感じで、木の枝に蚊取り線香をくくりつけて、ズボンの横にさしています。僕もまねして、腰に差していますが、最初は全然効果が無かったのですが、徐々に効果が出てき

ました。  
絶対にマラリアになりたくない僕は今では、撮影を始める前に、露出している肌の上に大量の虫除けスプレーをかけ、腰に蚊取り線香をつける、この強力タッグで、だいふ蚊にさされなくなりました。  
しかし、ご飯を食べる時の超大量の蟻だけはどうにもならず、一生懸命、蟻を払いながら、ご飯を食べる。そんな感じのタイでの日々です。

カテゴリ：

post by 志村 賢一 | 日時: 2009.05.08 | [パーマリンク](#) | [コメント \(1\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)

[明日は明日の風が吹く > 2009年05月 アーカイブ](#)

09.05.03

## 写真展

[Tweet](#)

[Check](#)

他の人のブログでも書いてありますが、4月28日にスナダイクマエ孤児院というところで写真展をひらきました。  
写真展の内容は日本の雪景色で孤児院の子供たちもかなり熱心に見てくれて、これまでの苦労が報われたと思ったひと時でした。



スナダイクマエで写真展をして僕が一番心に残ったことは、19歳の中学3年生の彼とゆっくり話す事が出来た事。

スナダイクマエ孤児院はメアスヒロコさんという日本人女性が施設責任者で孤児院の子供たちは日本語の教育を受けており、年上の子供たちは普通に日本語で会話出来ます。

彼とはいろんな話をしました。  
彼の将来の夢の事、カンボジアの事、学校の事、彼と話しているうちに、自分が日本に生まれた事がどうということなのか、深く考えさせられました。

人は生まれてくる場所で人生の選択肢の幅をかなり割合で決定づけられると思います。  
もし自分がカンボジアに生まれていたら、もし彼が日本に生まれていたら、そんな事を考えてもどうしようもないことだとわかってはいるけれど、でも彼との会話をしているうちに、そんな事を考えている自分がいました。

そのときベトナム人に言われた一言を思い出しました。  
『なぜあなたは日本に生まれたのに、自動車産業や、電気機器産業についての勉強をしないのか？なぜ金にもならない写真などを学んでいるのか』と。

貧しい地域に暮らしている彼らには、写真というものを学ぶ僕を理解できなかったのでしょう。  
彼らにとって写真は道楽に過ぎないのです。生きて行くためには、何をしなくてはならないのか、どうしたらもっと案に暮らすことが出来るのか。いつもそのような事を考えている彼らには、到底、僕が写真を学ぶ理由が理解出来ないのでしょう。結局、僕はその質問には何も答えられませんでした。

これらの問いは自分自身に向けられた刃です。自分は今なにをしているのか、何のために写真を撮っているのか。その問いをいつも自分自身に問いかけながら、答えがでない、この問いを問い続けます。

カテゴリ：

post by 志村 賢一 | 日時: 2009.05.03 | [パーマリンク](#) | [コメント \(0\)](#) | [トラックバック \(0\)](#)